

管理社会の恐怖の中で生まれた小さなラブ・ストーリー エンダ・ウォルシュの衝撃作が白井晃演出で待望の日本初演

2020年4月に日本初演を迎える予定だった『アーリントン』は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により全公演中止となりましたが、2021年1月に延期して上演されることになりました。

2018年に草薙剛主演で上演された『パリーターク』に続き、再び白井晃芸術監督がエンダ・ウォルシュの戯曲に挑む今作は2016年7月に発表された作品で、舞台は時も所もわからない、ある待合室。自分の名前が呼ばれるのを待つ若い女・アイーラと、隣の部屋でモニター越しにアイーラを見ている若い男が、不思議でいいおいしい(ラブ・ストーリー)を紡ぎます。

主人公アイーラを演じるのは、KAATプロデュース公演『恐るべき子供たち』(白井晃演出、2019年)での好演が印象に残る南沢奈央。若い男を演じるのは、KAATプロデュース公演『常陸坊海尊』(長塚圭史演出、2019年)に出演するなど舞台でも活躍目覚ましく、今回が白井作品初参加となる平笠生成です。また、ダンサー・振付家の入手杏奈が劇中の重要な役どころで出演します。

1月の上演が決まったことについて、南沢は「稽古してきたものが表に出ないまま公演中止になってしまい、行き場のない思いをずっと抱えていたので、本当に嬉しいしありがたいです」、平笠は「一旦寝かせたことで、

ワインみたいに熟成してくれたらいいな、とポジティブにとらえています」と語りました。

理不尽な社会を独特な世界観で描いた戯曲については、2人とも「コロナ禍の前と後では読んだ印象が変わってしまった」と口をそろえて答えました。「戯曲に描かれている抑圧された世界と、今の様々な制限がある状況とに共通する部分があると感じました」(南沢)、「この消費社会の中で、様々な意味で“成長”することが本当に正しいことなのか考えさせられました」(平笠)。

もう一人の出演者である入手杏奈について、南沢は「とても心を動かされる表現で、自分ももっと表現の幅を自由に広げたいと思いました」、平笠は「僕の中で杏奈さんは俳優。セリフと身体で表現方法が違って、3人の役者で物語を作っているという感覚」とそれぞれ語り、この作品における入手の存在の大きさを感じさせました。

コロナ禍での上演となる今作に向けて、「舞台上に立てるだけで幸せ。見てくださる方のちょっとした楽しみや希望になれたら」(南沢)、「白井さんはじめ、KAATや今作に関わっている人たちの思いや覚悟が伝わる作品にしたいです」(平笠)とそれぞれ抱負を述べました。



南沢奈央 (みなみさわ・なお) 2006年にドラマデビュー、09年に『赤い城 黒い砂』(栗山民也演出)で初舞台。近年の主な舞台出演作に『罪と罰』(フリップ・ブリン演出)、『恐るべき子供たち』(白井晃演出)、『ハムレット』(森新太郎演出)、『ハルシオン・デイズ 2020』(鴻上尚史演出)など。落語・読書好きとしても知られ、コラム連載、書評など多岐にわたって活躍している。



平笠生成 (ひらの・きなり) 舞台『私はだれでしょう』(栗山民也演出)で読売演劇大賞2017年上半期5部門ベスト5男優賞にノミネート。近年の主な舞台出演作に『誰もいない国』(寺十吾演出)、『日の浦姫物語』(鶴山仁演出)、『常陸坊海尊』(長塚圭史演出)など。ドラマ『おんな城主直虎』、『相棒元日スペシャル 選択』、映画『空母いぶき』など話題の映像作品にも数多く出演。



KAAT神奈川芸術劇場プロデュース
『アーリントン』(ラブ・ストーリー)
1月16日(土)~31日(日) | 大スタジオ |

[STAFF]
作:エンダ・ウォルシュ
翻訳:小宮山智津子 演出:白井晃

[CAST]
南沢奈央 平笠生成 入手杏奈

公演情報はp13参照

KAAT 10年の歩みを振り返る映像作品展と 劇場と美術の融合に挑むインスタレーション

この冬、KAATでは2つの現代美術の展示をお届けします。

1つは、オープンシアター2017での巨大スクリーンの映像展示をはじめ、白井晃芸術監督とも舞台作品でタッグを組み、独自の映像世界を創造するビデオ・アーティストの宮永亮による、宮永亮展「KAA10」です。KAAT開館10周年記念企画として、宮永は、この10年間にKAATで上演された様々な舞台のフライヤーを用いた新作映像作品を制作、劇場アトリウムの10箇所で開催します。

もう1つは、現代美術と舞台芸術の融合による新しい表現を、劇場の独特な空間で展開する企画「KAAT EXHIBITION」の第5弾として開催される、富安由真展「漂泊する幻影」です。絵画・インスタレーション・ビデオなど多様なメディアを用いて、不可視なものに対する知覚を鑑賞者に疑似的に体験させる作品を制作している富安が、新作インスタレーションによって「此处」と「何処か」が絶えず交換し続ける境界面へと鑑賞者を誘います。

劇場で展示を行うことについて、宮永は「KAATは自分なりのチャレンジの場所という思いがあります。映像は人に影響を与える力が強いので、今回はアトリウム内の10箇所に展示するということで、人の動きを誘発するような展示にしたいと考えています」、富安は「ホワイト・キューブのときは構造物をしっかり立ててやることが多いですが、せっかく劇場でやるからには普段はできないような、劇場の空間を生かした表現にしたいと思いました」と語りました。

普段の作品制作で大事にしているところについて尋ねると、宮永は「実写の動画を使うことは一つ大事にしています。映画的に作るのではなく、実写映像を重ねて作るところが重要です。加えて、俯瞰的な視点についても意識して作っています」、富安は「例えばノックの音は録音を流すのではなく、実際にノックの音が発生するような仕掛けを作ったり、自分なりのリアリティを取り入れたいと思って作っています」と各々のこだわりを教えてくださいました。

白井芸術監督について、宮永は「演出家として非常に粘り強く、柔軟性もあるところが魅力だし、自分の作品創りの姿勢と通じるものを感じました」、富安は「私の作品における“不在性”の大切さを見抜いてくださって驚きました。作品の本質を尊重し優先してくださる真摯さを感じています」と印象を語りました。現代美術を劇場で展開するソフトウェアとして一つの柱に据えてきた白井芸術監督の強い思いもこめられた2つの展示をぜひお楽しみください。



KAAT神奈川芸術劇場開館10周年企画
宮永亮展「KAA10」
2020年11月21日(土)~2021年1月31日(日) | アトリウム |

詳細は <https://www.kaat.jp/d/kaa10>



宮永亮 (みやなが・あきら) 京都をベースに活動するビデオ・アーティスト。カメラでとらえられた実写映像素材を幾重にも塗り重ねる手法を用いて、主に現代美術の領域でビデオ作品、ビデオ・インスタレーション等の発表を行っている。KAATでは「KAAT EXHIBITION 2017」に参加のほか、『華氏451度』(白井晃演出・2018年)の舞台映像を担当。



©Yuma Tomiyasu Photo by Masanobu Nishino

KAAT EXHIBITION 2020
富安由真展「漂泊する幻影」
1月14日(木)~1月31日(日) | 中スタジオ |

詳細は <https://kaat-seasons.com/exhibition2020/>



富安由真 (とみやす・ゆま) 美術作家。東京を拠点に、不可視なものに対する知覚を鑑賞者に疑似的に体験させる作品を制作する。近年、ART FRONT GALLERYでの個展「Making All Things Equal / The Sleepwalkers」や、西武渋谷店美術画廊・オルタナティブスペースでの個展「Midnight Visitors 真夜中の来訪者」では、絵画を交えたインスタレーション作品を発表している。

**1月14日(木)~23日(土)の10日間は
3つの展覧会が同時開催**

上記2つの展覧会に加え、隣接する神奈川県民ホールギャラリーでは大山エンリコイサム展「夜光雲」が1月23日(土)まで開催中です(詳細は <https://yakouun.net/> にてご確認ください)。1月14日(木)~23日(土)の10日間は、この3つの展示が同時開催される期間となりますので、是非併せてご覧ください。

※大山エンリコイサム展「夜光雲」の有料チケット半券をお持ちの方は、富安由真展「漂泊する幻影」が100円引きとなります。
※富安由真展「漂泊する幻影」の有料チケット半券をお持ちの方は、大山エンリコイサム展「夜光雲」が100円引きとなります。